

# 「樋爪氏の墓」をめぐる話

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

大通り上河原交差点から北東へ上河原通りを行つた左側に小さな社がある。門柱に三峰神社と樋爪五郎墓とあり、社殿内部には破損した五輪塔が二基安置されている。それが樋爪氏の墓だという。

宇都宮市教育委員会が設置した文化財案内板には「二つの五輪塔は、文治五（一一八九）年、源頼朝が奥州の藤原氏一族を攻めたとき、祈願成就のお礼の生贄として二荒山神社に献納された、樋爪俊衡と弟季衡の墓と伝えられている。この墓を樋爪季衡とその子経衡とする説もある。なお、この二



宝珠と笠石を欠いた五輪塔

つの墓には、二荒山神社に関わる悲話伝えられている」とある。

ところで、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』には、源頼朝が藤原泰衡を討つために、鎌倉から奥州に向かう途中と戦いに勝つて鎌倉に凱旋する途中の二度、宇都宮明神へお参りしたことが記されている。その大要は「七月二十五日、下野国古多橋の駅に到着すると、まず宇都宮明神（二荒山神社）にお参りし、戦勝祈願をした。首尾よく戦いに勝つた際には、生虜（捕虜）一人を神職として奉る」、「十月十九日、宇都宮明神にお参りし、莊園を寄進するとともに生虜の樋爪太郎俊衡一族を神職として奉る」とある。

宇都宮市教育委員会が設置した案内板の解説は、吾妻鏡が原点と思われる。ところで、吾妻鏡ではさらに「九月十五日、樋爪太郎俊衡ならびに弟の五郎季衡が降伏した。六十を過ぎ白髪の俊衡を見た頼朝

はその老体を憐れみ、死一等を減じて家来の八田知家に身柄を預け、さらに本所を安堵した」ともある。俊衡は許されて本所にもどり、宇都宮に生虜としてつれて来られることはなかった。ならば、もう一基の五輪塔は、誰を供養したものなのか。二荒山神社に伝わる『二荒山神社年表紀事略』（明治二十五年）には、「季衡及子経衡ノ墓、今上河原橋ノ西南大川氏ノ宅地にあり」と、季衡の子ども経衡を供養したものとある。案内板に「季衡とその子経衡とする説もある」との解説は、二荒山神社年表略記によるものであろうか。

案内板ではさらに「二荒山神社に関わる悲話が伝えられている」とあるが、悲話とは次のような話と思われる。「樋爪季衡は、故郷恋しさのあまり逃げ帰ろうとして、上河原まで走ってきたが、追っ手に追われて殺害された。その殺された

所を樋爪坂といい、首は上河原に、胴は今泉に葬られたという。また上河原で殺され、首は向う岸の博労町に飛んだといわれる。そしてその首を祀つたところを首塚稲荷という」

世間に伝えられる話には、史実を原点としながらも、語り伝えられて行くうちに改変されたものが少なくない。この樋爪氏にまつわる悲話もその一つで、首を切られた者の霊が怨霊となつて各地に飛んだといういわゆる首塚伝説の部類に属する話である。季衡は頼朝により宇都宮明神に仕える者として捧げられた者である。季衡はそのことわきまえて二荒山の神職となつたはずで、逃げだすことなど考えられない。悲話が生まれた背景には、季衡は敗者であり、また生虜という言葉が誤解され、その結果、季衡を悲運の者として憐れむようになつた。それが悲話を生み出したものと思われる。



三峰神社入口